

不定詞節と仮定法現在節の統語構造分析 : wh 島と that 生起の現象を中心に

松本, 知子
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790845>

出版情報 : 九大英文学. 51, pp.117-133, 2009-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



不定詞節と仮定法現在節の統語構造分析*

－wh 島と that 生起の現象を中心に－

松本 知子

1. はじめに

従属節は、動詞の形態によって定形節と非定形節に大別される。これらの節の間には多くの文法的相違点が確認される。本稿では、非定形節に分類される不定詞節と仮定法現在節を取り上げ、wh 島と that 生起の現象から、定形節との違いを考察する。そして、それは双方の節が持つ統語構造の違いによって導出されるものであると主張する。

まず、定形節と仮定法現在節との大きな違いの一つとして、(1)のような補文標識 that の生起が義務的か否かの違いが挙げられる。

(1) a. Mary expects (that) Sue will buy the book.

b. We insisted * (that) he leave at once.

次に、wh 島からの目的語の wh 句の取り出しに関する容認性にも定形節と不定詞節/仮定法現在節の間には違いがある。

(2) a. *What_i do you wonder [where_j he bought t_i t_j]. (Oba (2000: 79))

b. What_i do you wonder [how_j to cook t_i t_j] ? (Boeckx (2003: 185))

c. What_i do you wonder [how_j you should cook t_i t_j] ? (ibid.)

(2a)の定形節からは wh 句の取り出しが許されないのに対し、(2b)の不定詞節と(2c)の仮定法現在節からの取り出しは許される。

最後に、数量詞の解釈に関しても定形節と非定形節間には違いがある。

(4) Apparent optionality of *that* in complement CP

a. Mary expects [_{CP} [_T *that*]_j + [_C, #F] [_{TP} Sue will buy the book]].

“...that Sue will buy the book...”

b. Mary expects [_{CP} [_{Sue}, #F]_j + [_C, #F] [_{TP} *t*-_{Suej} [_T will]_j buy the book]].

“...Sue will buy the book...”

(5) Motivation for T-to-C movement (Pesetsky and Torrego (2001: 4))

C bears an uninterpretable T feature (henceforth *uT*) with the EPP property.

そして、P&T が仮定する統語範疇とそれらが持つ素性をまとめると(6)のようになる。

(6)

C	[<i>uT</i>] (解釈不可能な Tense 素性)
主語 DP	[<i>uT</i>] (解釈不可能な Tense 素性)
T	[<i>iT</i>] (解釈可能な Tense 素性)

これらの仮定をもとに、P&T は、(4a)の文を以下のように分析している。(4a)では、補文標識 *that* が T-to-C 移動をし、C⁰の[*uT*, +EPP]を照合、削除している。つまり、補文標識 *that* は、(7)のように、もともと T 位置で基底生成され、C 位置で具現化されると仮定している。

(7) Nature of English *that* (Pesetsky and Torrego (2004: 499))

That is not C, but a particular realization of T moved to C.

そして、(4b)の *that* が存在しない場合は、従属節内の主語 DP (Sue)が C⁰の[*uT*, +EPP]を照合、削除すると仮定している。² 従って、定形節補文においては、C⁰の[*uT*, +EPP]素性は、補文標識の *that* の T-to-C 移動か、従属節内の主語 DP の[Spec, CP]への移動によって照合されるという2つのオプションが存在す

ることになる。

しかし、(8a, b)の主節主語 CP に関しては、(8a)のように *that* の T-to-C 移動により C の [uT , +EPP]素性が照合されるオプションしか存在しない。なぜなら、(8b)では、従属節ができた段階 (CP が主節主語となるために移動する前) で、主語 DP (Sue)の [uT]は削除されており、主節主語として生起できないからである。他方、(8a)の場合、*that* は [iT]を持つため、主節の T と照合し、*that* を伴う節が主節主語 CP として生起する。

(8) [subject CP→obligatory *that*]

- a. [That Sue left] is obvious.
- b. *[Sue left] is obvious.

(9)と(10)は *that* と同じ振る舞いをするものとして *for* が存在することを示している。(9)は(7)に倣って書いた *for* の性質である。不定詞節における *for* の場合も *that* の場合と同様に C^0 の [uT , +EPP]素性を照合、削除するためのオプションとして、*for* の T-to-C 移動か、従属節内の主語 DP の [Spec, CP]への移動の2つがあると考えられる。しかし、主語の CP においては、(8a)と同様に、(10c)のように *for* の T-to-C 移動により C の [uT , +EPP]素性が照合、削除される。そして、*for* が [iT]を持つため、主節の T と照合し、*for* を伴う不定詞節が主節主語となる。(10d)では、(8b)と同様に、従属節ができた段階 (CP が主節主語となるために移動する前) で、DP の [uT]は削除されており、不定詞節の主語移動の操作は認められない。

(9) Nature of English *for*

For is not C, but a particular realization of T moved to C.

(10) For-omission asymmetry

[nonsubject CP→optional *for*]

- a. Mary would prefer [for Sue to leave].
- b. Mary would prefer [Sue to leave].

[subject CP→obligatory *for*]

(ibid.: 500)

c. [For Sue to leave] would be desirable.

d. *[Sue to leave] would be desirable.

このように、P&T (2001, 2004)の T-to-C 移動分析により、補文標識 *that* と *for* の生起が主節主語でない CP においては任意であることと主節主語 CP においてはその生起が義務的であることを原理的に説明できる。

3. 不定詞節と仮定法現在節の共通点と統語構造

3. 1. 不定詞節と仮定法現在節の共通点を踏まえた統語構造

今まで、不定詞節と仮定法現在節の共通点が多いことが指摘されてきた。例えば、(11)のように、意志・決定・提案などを表す同種の動詞によって選択されることが挙げられる。そして、この特徴は、ギリシャ語やスペイン語、日本語などの言語にも見られる (Joseph 1992, Terzi 1992, Uchibori 1997)。

(11) a. John (agreed / decided / proposed) [to resign from his position].

b. John (agreed / decided / proposed) [that he should resign from his position].

また、どちらの補文も「未来」や「願望」に関する心的態度 (モダリティ) を持つことが挙げられる (Martin 2001, 西岡 2007)。

(12) a. Bob wants [to buy a new camera].

b. He suggests [that you be more receptive].

そして、このモダリティは C として位置づけられると考えられる。それは、(13)の Chomsky (1995)の記述から、C は mood もしくは force を示す場所として位置づけられることからわかる。モダリティと法 (mood)の違いについては、澤田 (2006: 118)に従い、法 (mood)はモダリティを表すための主要な文法的手段の一つであるとする。そこで、(14)のように、Bhatt (2006)の不定詞の間接疑問文の C が modal の解釈を持つという点も踏まえ、不定詞節と仮

定法現在節が共通して表すモダリティを構造に反映させ、ModP を CP の一部として仮定する。この仮定は、Rizzi (1997)の CP が Force Phrase > Topic Phrase > Focus Phrase という階層構造からなるという分析に倣ったものである。

(13) “C is basically an indicator of mood or force...”

(Chomsky (1995:240))

(14) a. Hafdis knows [where_i C⁰ [PRO to get gas t_i]]

(≈Hafdis knows where she can get gas)

b. Hafdis knows [who_i C⁰ [PRO to talk to t_i at the party]]

(≈Hafdis knows who she should talk to at the party)

“C⁰ [+rel/wh, +inf] is interpreted as the modal.”

(Bhatt (2006: 14-15))

そして、今までの仮定を踏まえて、不定詞節と仮定法現在節の節構造を(15)のように仮定する。(15)では、CP-ModP-TPの階層があり、これらの主要部が移動によって一定の統語関係を形成すると仮定する。³ さらに、この節構造における統語的移動は、(16)の仮定のもとで機能すると考える。

(15) 不定詞節と仮定法現在節の節構造



(16) a. T から Mod への主要部移動は、Mod が持つ解釈不可能な Mod 素性 [uMod]による。

b. C への移動は、C が持つ解釈不可能な時制素性[uT]による。

(Pesetsky and Torrego (2001, 2004))

c. C 及び Mod の指定部への移動は、これらフェイズ主要部が持つ端素性 (Edge Feature: EF)による。

(Chomsky (2005))

そして(17)は、(6)の P&T が仮定する統語範疇とそれらが持つ素性に倣い、不

定詞節と仮定法現在節に関する各範疇の持つ素性をまとめたものである。ここでの提案で重要な点は、Mod が解釈不可能な Mod 素性を持ち、T が解釈可能な T 素性とともに関与可能な Mod 素性を備えている点である。

(17)

C	[uT] (解釈不可能な Tense 素性)
Mod	[uMod] (解釈不可能な Mod 素性)
主語 DP	[uT] (解釈不可能な Tense 素性)
T	[iT] と [iMod] (解釈可能な Tense 素性と解釈可能な Mod 素性)

3. 2. 仮定法現在節の統語派生

前節で述べた仮定の基で、まず仮定法現在節の派生を(18a)の例文をもとに考察する。(18b)は(18a)の派生を示したものである。

(18) a. We insisted ^{*}(that) he leave at once. (= (1b))

b. We insisted [_{CP} [_T that_i]_[uT] [_{ModP(CP)} Mod_[uMod] [_{TP} he_[uT] T_{[iT][iMod]}]_[vP leave at once]]]]

(18a)の派生では、まず Mod の[uMod]を照合、削除するために [iMod]を持つ T (that)が T-to-Mod 移動をする。次に、C の[uT]を照合、削除するために、[iT]を持つ T が、さらに Mod-to-C 移動をする。そして、that が T-to-Mod-to-C 移動をした結果、C として具現化される。さらに、(19)のように、仮定法現在節が主節主語として生起することは、that の T-to-Mod-to-C 移動が生じている証拠と考えられる。

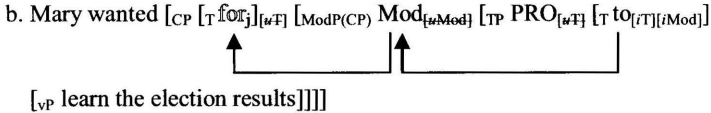
(19) That John be given the leave to go has been requested by school authorities.

(Hiroe (1999: 57))

3. 3. 不定詞節の統語派生

3.2 節の仮定法現在節の統語派生と同様に、不定詞節の統語派生を考察する。(20b)は(20a)の派生を示す。

(20) a. Mary wanted [PRO to learn the election results].



(20b)の不定詞節の派生は(18b)の仮定法現在節と同様に、まず、Mod の[uMod]を照合、削除するために [iMod]を持つ T が T-to-Mod 移動をする。次に、C の[uT]を照合、削除するために、[iT]を持つ T が、さらに Mod-to-C 移動をする。ここで、(20a)においては(9)で説明した for の null なものが存在し、それは T-to-Mod-to-C 移動をした結果、C として具現化すると考えられる。そのように考えられる理由として、(21)のように、for が顕在化することなく不定詞節が主語として生起することが挙げられる。

(21) [PRO to learn the election results] would shock me.

(Pesetsky and Torrego (2004: 501))

4. 分析

この節では、前節までに述べた提案を基に、第一節で挙げた(1)から(3)の仮定法現在節と不定詞節の、定形節には見られない統語的振る舞いについて分析する。

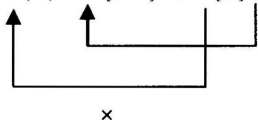
4. 1. 仮定法現在節における that の義務的生起

(1a)で挙げたように、定形節補文においては補文標識 that の生起が任意であるのに対して、(1b)で挙げた仮定法現在節においては that の生起が義務的であることを P&T の T-to-C 移動分析と ModP を仮定した提案をもとに説明する。第二節で P&T の分析を概観し、C の[uT, +EPP]素性を照合、削除する

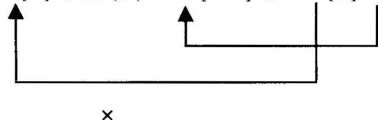
ためのオプションとして補文主語の[Spec, CP]への移動と補文標識 *that* の T-to-C 移動の2つ考えられると述べた。まず、前者の可能性、つまり、*that* が生起せず、仮定法現在節内の主語が[Spec, CP]へ移動する可能性を(22)を例に検証する。(23a, b)にその派生を示す。

(22) *We insisted he leave at once.

(23) a. ... [_{ModP}(CP) Mod [_{uMod}] [_{TP} he [_{uT}] T [_{iT}] [_{iMod}] [_{vP} leave at once]]]



b. [_{CP} C_[uT] [_{ModP(CP)} Mod_[uMod] [_{TP} he_[uT] T_[iT] [_{iMod}] [_{VP} leave at once]]]]

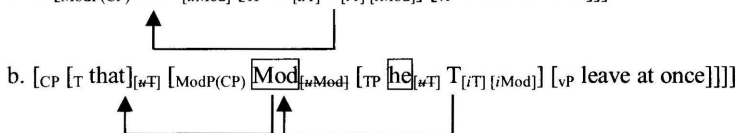


ボトムアップ形式で派生が進むとすると、(23a)に示したように、まず Mod の[uMod]を照合、削除するために [iMod]を持つ T が T-to-Mod 移動をする。それから、[Spec, ModP]に主語 DP が移動する可能性が考えられる。しかし、Mod に[uT]は存在しないため、その移動は正当化されない。さらに派生が進んで、(23b)の段階まで到達すると、今度は、主語 DP が[Spec, CP]に上がって C の[uT, +EPP]素性を照合、削除する可能性が考えられる。しかし、C からは、Mod に移動した[iT]を持つ T の方が主語 DP よりも近い位置にあるので、ここでも主語 DP の移動は正当化されない。したがって、仮定法現在節において、that が生起しないことが許されないことを、Mod を介した T から C への移動を仮定することで自然に導き出すことができる。

次に、that 生起の派生、つまり、that の T-to-Mod-to-C 移動の可能性について(24)の例文をもとに考える。(25a, b)はその派生を示す。

(24) We insisted that he leave at once.

(25) a. ...[ModP(CP) Mod_[uMod] [TP he_[uT] T_{[iT] [iMod]}] [vP leave at once]]]



まず、(25a)に示すように、(23a)と同様、T-to-Mod 移動が生じる。この移動により、Mod の[uMod]が照合、削除される。派生が進んで(25b)の段階で、C からは、Mod に移動した T の方が主語 DP よりも近いいため T の方が移動すると考えられる。結果として、that が T-to-Mod-to-C 移動をして、C 位置で具現化される。このように that が生起しない派生と生起する派生の両方を検証し、ModP を仮定した構造を立てることによって、仮定法現在節においては that が義務的に現れることを説明できる。

4. 2. wh 島からの目的語の wh 句の取り出し

(2a-c)で挙げた wh 島からの目的語の wh 句の取り出しに関する文法的対比についても、第三節で述べた提案を基に説明できる。(2a)を再び(26)として示す。

(26) *What_i do you wonder [CP where_j [TP he bought t_i t_j]]. (= (2a))

(Oba (2000: 79))

(26)の定形節補文からの目的語の wh 句 (what)の抜き取りが許されないのは、where を飛び越えて移動しているためである。具体的には、(27)の「移動の標的に最も近い要素を移動しなければならない」という最小連結条件(MLC)違反や(28)の、フェイズのドメインにはアクセスできないというフェイズ不可侵条件 (PIC)違反の観点から説明される。

(28) Phase Impenetrability Condition (PIC)

(Chomsky (1995: 311))

(Chomsky (2000: 108))

b. What_i do you wonder [how_i you should cook t_i t_j]? (ibid.)

- 127 -

(31a)では、Modが生起した時点でT-to-Mod移動が生じる。そしてフェイズ主要部Modが持つ端素性によってwh句が指定部に移動するが、closest c-commandの条件に従い、まずhowの方が[Spec, ModP]に移動すると考えられる。そして、whatはhowの移動の後にtuck-inすると分析する。派生が(31b)の段階まで進み、Cの[μ T, +EPP]素性を照合、削除するためのMod-to-C移動が生じる。そして、whatよりも上位にあるhowがフェイズ主要部Cの端素性により[Spec, CP]に移動し、Cとの素性照合によりhowの解釈不可能なwh素性とCの解釈不可能なQ素性は削除される。ここでも、Mod-to-C移動によって、(31c)に示すように、主節動詞からhowの存在する[Spec, CP]までの距離と主節動詞からwhatの存在する[Spec, ModP]までの距離が等距離(equidistance)になることから、whatが主節動詞とAgreeをし、[Spec, ModP]を逃避口(escape hatch)として、最終的に、(30d)に示すように主節の[Spec, CP]へと移動する。そして、(29b)の派生は収束すると考えられる。

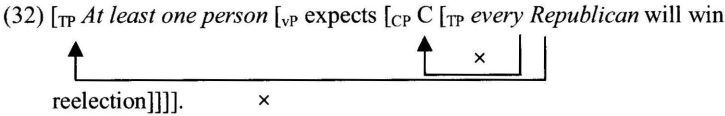
従って、今までの議論から、P&TのT-to-C移動分析とChomsky (2005)のフェイズ理論の援用、そして、不定詞節と仮定法現在節の共通点を踏まえたModP投射を立てることにより、wh島からの目的語のwh句の取り出しが可能である事実を説明できる。

4. 3. 数量詞の解釈に関する対比

最後に、(3a-c)に挙げた数量詞の解釈に関する対比について第三節で挙げた提案を基に分析する。分析するにあたって、西岡 (2007)の数量詞繰り上げ(Quantifier Raising: QR)に関する分析を援用する。

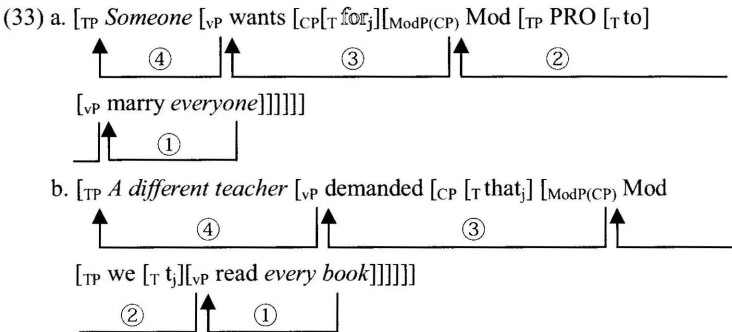
QRは、一般に節内制限に従うと考えられているが、(3b, c)の不定詞節や仮定法現在節は例外である。というのも、不定詞節と仮定法現在節においては、従属節内の普遍数量詞が主節の主語位置の存在数量詞よりも広い作用域を持つことができるからである。このようなQRに関して、西岡 (2007)は、QRにはAgreeに基づく義務的QRとAgreeに基づかない随意的QRがあり、随意的QRは意味効果がある場合のみ適用できると分析している。⁶ 義務的QRでは、vに随意的に付与されたP素性とQPの解釈不可能な[q]素性の照合、削除が行われる。この分析を援用し、まず(3a)に挙げた定形節補文における

QR について議論する。(3a)を(32)に示す。



定形節補文内の普遍数量詞が主節の主語位置の存在数量詞よりも広い作用域を持つためには、前者が後者を C 統御する位置に QR しなければならない。しかし、(32)の上部の矢印で示す CP への QR の適用は、意味効果が生じないので許されない。また、下部の矢印が示す主節の TP への直接的移動は、CP と vP の2つのフェイズの介在により、(28)の PIC に違反し、許されない。従って、定形節補文内の普遍数量詞は主節の主語位置の存在数量詞よりも広い作用域を持つことができないことを QR の意味効果と PIC の観点から説明できる。

次に、不定詞節と仮定法現在節において QR の節内制限がないことを(3b,c)の例を基に説明する。(3b)の構造を(33a)に示し、(3c)の構造を(33b)に示す。



派生を順に追って考えると、まず、①は義務的 QR で、この移動により、QP の解釈不可能な[q]素性が照合、削除される。次に②は、ModP の生起により意味効果があると考えられるため、随意的に QR する。③の QR は内包述語を超えるため、意味効果を持ち、随意的に行われる。最後の④は、スコープ

の逆転が生じるため、意味効果を持ち、随意的に QR する。従って、不定詞節内と仮定法現在節内の普遍数量詞が主節の主語位置にある存在数量詞よりも広い作用域を持つことを、西岡 (2007)と Fox (2000)の援用と、機能投射 ModP の存在により説明される。

5. まとめ

本稿では、定形節と不定詞節/仮定法現在節との文法的対比について、意味と構造の対応性の観点から、不定詞節/仮定法現在節にのみ見られる共通点(モダリティ)を構造に反映して分析を行った。まず第二節では、分析するにあたって必要となる先行研究である Pesetsky and Torrego (2001, 2004)の T-to-C 移動分析を概観した。第三節では、不定詞節/仮定法現在節において機能投射 ModP の存在を仮定し、T-to-Mod-to-C 移動と Chomsky (2005)の仮定する端素性によって一定の統語関係が築かれると提案した。第四節では、第三節での提案を基に文法的対比の説明が可能であることを示した。

本稿の理論的な意義は、今まで例外として扱われ記述的な説明にのみ留まっていた現象、例えば不定詞節や仮定法現在節において wh 島制約の違反がないことや QR の節内制限がないことを、両者の共通点を生かした分析により説明し得た点にある。しかし、不定詞節や仮定法現在節においてみられる透明性効果はこれら2つに留まらない。これらについての検討は、今後の課題としたい。

註

* 本稿は日本英文学会九州支部第 61 回大会 (2008 年 10 月 25 日、於：福岡大学)において口頭発表したものに修正を加えたものである。本稿作成にあたっては、西岡宣明先生から示唆に富む大変貴重なご指摘を頂戴した。特記して感謝の意を表したい。なお、本論の不備は全て筆者の責任である。

1. 本稿で取り扱う不定詞節は、仮定法現在節との共通点という観点から、〈非現実〉(irrealis)の θ 役を担うコントロール補文に限ることとする。
2. 従属節の主語 DP の $[\mu T]$ 素性は主節の C^0 に移動する以前に従属節の T^0 により照合さ

れているが、それは以下に示す“marked for deletion”の原理に従うと考えられている。
“Once an uninterpretable feature F on X has attracted, F is said to be *deleted*. We will sometimes use the clumsier phrase *marked for deletion* because (as we will show) the final disappearance of F on X may be delayed until a later point of derivation.”

(Pesetsky and Torrego (2001: 360))

3. ModP の上位にある範疇は便宜上 CP と仮定する。
4. Richards (1997)で提案されているtuck-inは以下のように定義される。

Tuck-in

Later XP movement target inner specifiers, i.e., they tuck in.

5. 従属節の[Spec, vP]を通る *wh* 句の移動は省略して記している。
6. Chomsky (2001)は、以下のように随意的操作は意味効果がある場合のみ適用できると述べている。

“Optional operations can apply only if they have an effect on outcome.”

(Chomsky (2001: 34))

参考文献

- Boeckx, Cedric (2003) *Islands and Chains: Resumption as Stranding*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Bhatt, Rajesh (2006) *Covert Modality in Non-finite Context*, ed. by Artemis Alexiadou and T. Alan Hall, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,”*Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michael and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,”*Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2005) “On Phases,”ms., MIT
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) “Filters and control,” *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.

- Fox, Danny (2000) *Economy and Semantic Interpretation*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hiroe, Akira (1999) "Mood and Complementizer Deletion," *English Linguistics* 16, 55-77.
- Joseph, Brian, D. (1992) *Diachronic Perspectives on Control*. Control and grammar, ed. by Richard K. Larson, Sabine Iatridou, Utpal Lahiri, and James Higginbotham, 195-234. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Kayne, Richard S. (1998) "Overt vs covert movement," *Syntax* 1, 128-191.
- Klima, Edward E. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, NJ.
- 桑原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作編, 研究社出版, 東京.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』開拓社, 東京.
- Martin, Roger (2001) "Null Case and the distribution of PRO," *Linguistic Inquiry* 32, 141-166.
- 西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究—素性照合と介在効果』くろしお出版, 東京.
- Oba, Yukio (2000) "Island Phenomena and Search Spaces of a Probe," *Linguistic Analysis* 30, 1-2, 67-92.
- Pesetsky, David and Torrego Esther (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequences," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, eds., 355-426, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Pesetsky, David and Torrego Esther (2004) "Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories," *The Syntax of Time*, ed. by Jacqueline Gueron and Jacqueline Lecarme, 495-537, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Richards, Norvin (1997) "What makes where when in which language," doctoral dissertation, MIT, Cambridge.
- Rizzi, Luigi (1997) "The fine structure of the left periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Terzi, Arhonto (1992) *PRO in Finite Clauses: A study of the Inflectional Heads of the Balkan Language*, doctoral dissertation, CUNY, New York.
- Uchibori, Asako (1997) "Opacity and Subjunctive Complements in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 6, 399-414.